

「落ち着き」という心性

言わないでいられなくて一言、考えるところを簡単に申します。

学童の落ち着きのなさや学力の低下は、生物現象でしょうか？ 酵素欠損やホルモン異常（過剰あるいは過小）のような脳の機能異常と同列に位置づけられる生物現象でしょうか？ そうではなくて、これは文化現象ではないでしょうか。幼少時期（人間形成期）の「環境」が人格の基礎をつくります（三つ子の魂百まで）。そこでつくられた基礎が学童期にいたって、「落ち着き、集中力、考えるエネルギー、踏ん張る力、やり果せずにはおかない感情」の「有無」となって発症するのではないのでしょうか？

身のうちに芽生えた感情を、最初から最後まで自分の肉体（脳も肉体の一部）を使ってなんども繰り返し工夫して（幼児は工夫しているとも思っていません）満足ゆくところまでやり果すことができる「環境」にあった子供と、出来合いの模造品（テレビの画面にかぎらない）を与えられて本物の最初を知らず、あげくにひっきりなしに中断させられて最後も知らずに終わってしまう「環境」にあった子供とは、人格が違うのではないのでしょうか？

はっきりさせておきたい、幼小児の「環境」は親の人格です。今日の「平穏日本」では、そのほかには「環境」はありえません。「親の環境」が崩壊して別個の環境に子供がおかれることはありえないでしょう。今日の一般的、大半の「親の環境」は、後日「落ち着き、集中力、考えるエネルギー、やり果てせずにはおかない感情」などの欠損を持って発現する文化疾患の原因となっている、としか思えません。そして実に、親もその他（保母、教員エトセトラ）も「平穏日本」にあって、「その親」の環境の子でした。文化は血よりも濃く「遺伝」します（生みの親より育ての親）。事態はまったく深刻です。子が自立して学ぶ力を培う新たな「環境」を我々が社会制度として創出できるか（そんなことをどうやって？）に未来がかかっていると思うのです。人間の営為は所詮人格によります。「環境」は1分1秒連続する親の人格の行いで、だれしも、後戻りのきかない治療を我が子にしているわけです。教科書や訳本、マニュアル片手にする類の事ではありません。

(2000.05..29)